

群と陰性群での疾患活動性などを比較することでレミチェックQの臨床での有用性について検討した。

【方法】当院でIFXを投与している患者のうち、レミチェックQの検査を施行した57例を対象とした。レミチェックQを検査した時点の疾患活動性、検査所見、IFX投与量、投与間隔、IFX以外の治療内容について横断的に解析を行った。

【結果】57例中11例が男性、46例が女性、平均年齢は57.2±11.3歳であった。IFX平均投与量は6.4±2.7 mg/kg、平均投与間隔は7.4±1.6週であった。プレドニゾロン平均投与量は1.50±1.81 mg/日、メトトレキサート平均投与量は7.9±2.3 mg/週であった。疾患活動性は、DAS28-ESRは2.62±1.01、DAS28-CRPは2.08±0.94、CDAIは5.8±6.0、SDAIは6.1±6.3、HAQは0.33±0.53と疾患活動性は平均としてはおおむね良好であった。レミチェックQは57例中44例で陽性、13例で陰性であった。レミチェックQ陽性群と陰性群では、DAS28-ESRやDAS28-CRPでは有意差を認めないが、CDAI(陽性群6.6±6.5、陰性群3.1±2.7, p<0.05)、SDAI(陽性群6.9±6.8、陰性群3.2±2.7, p<0.05)、HAQ(陽性群0.40±0.57、陰性群0.06±0.15, p<0.01)ではいずれもレミチェックQ陰性群で有意に低値であった。レミチェックQ陰性であった13例を検討すると、全ての症例で寛解、あるいは低疾患活動性と疾患活動性のコントロールは良好であり、5例ではBoolean寛解も達成していた。

【結論】当院ではレミチェックQ陰性で寛解している症例が多くみられた。一方でレミチェックQ陽性でも疾患活動性が高い症例がみられ、レミチェック陽性群と陰性群の比較では陰性群で疾患

活動性が低い傾向にあった。レミチェックQ陰性群にはIFXの反応性が良好な症例が集積し、IFXでの治療反応性が良くない症例は当院では速やかにIFXが増量されるためレミチェックQ陽性群に疾患活動性が高い症例が集まっていた可能性があると考えられた。

### 3 自己免疫性肝炎を合併した皮膚ムチン沈着症の1例

石渡 彩乃・河合 亨・藤原 浩  
長谷川 剛\*・須田 剛士\*\*

魚沼基幹病院皮膚科  
同 病理診断科\*  
同 消化器内科\*\*

症例は57歳、女性。2013年秋、大腿後面に紅斑、体幹の疼痛を自覚した。2014年8月に大学病院を受診し、皮膚生検でムチン沈着症と診断した。ステロイド外用で軽快するも自己中断した。2018年4月、症状再燃し当科を受診した。血液検査で肝胆道系酵素の上昇と抗核抗体陽性所見を認めた。肝生検でAIH-PBC mixed typeと診断し、ウルソデオキシコール酸内服開始とした。真皮内や肝細胞の血管周囲でアルシアンブルー、EMA、MUC5ACがそれぞれ陽性を示した。

## II. 特別講演

### 全身性強皮症の病態に沿った最新治療法

東京女子医科大学医学部  
膠原病リウマチ内科学

臨床教授 川口 鎮司